体育授業における潜在的カリキュラムの事例的研究
―「格差」と「平等」を視座として―

阿部　直紀

A study of hidden curriculumin physical education class
― As a point of view on “difference” and “equality” ―

Naonori ABE

1. 研究の目的

体育授業で子どもたちには，学習活動を進めていく中で「できる」や「できない」，または「わかる」や「わからない」といった自己の尺度的観点から，『格差意識』というものが存在していると考えられる．その中で，運動をする子どもとそうでない子どもの二極化など，生涯にわたって運動に親しむ資質や能力が十分に図られていない例も見られるといった課題も見えてきている（文部科学省，2009）．さらに，体育授業が運動嫌いを生み出しているといった厳しい意見も聞こえてきている．子どもたちは，格差意識が存在することによって運動に対する好意的態度が育むための体育の学習が十分にできていないのではないだろうか．

経済の視点から格差や平等に関して述べている文献は存在する．その中で言われている意味の中に，格差自体は悪いものではなくその理由が正当であれば問題はないという考え方がある（ピケティ，2014）．また，平等については多様性という考えから，ある面での平等の主張はほかの面での不平等となりうるとの考えもある（セン，1999）．我々は「格差」と「平等」について現代に即してとらえなおし，なぜそれらが問題となっているかを考え直す必要があるのではないだろうか．

本研究は「格差」と「平等」を視座として，その概念を体育授業に置き換え，実際に学ばれている潜在的カリキュラムについて指摘することを目的とする．

【研究1】

2. 方　法

本研究の主題の規定詞である「格差」と「平等」の概念を設定する．そのために関連する文献から，一般的な「格差」と「平等」の概念を抽出する．そして，この「格差」と「平等」を体育授業に置き換えた概念として導き出し，構造的な図に表す．

主な対象文献を以下に示す．

・トマ・ピケティ著
　山形浩生 守岡桜 森本正史訳
　　『21世紀の資本』（みすず書房）
・アマルティア・セン著
　池本幸生 野上浩生 佐藤仁訳
　　『不平等の再検討』（岩波書店）

3. 考　察

「格差」を考える際，個人間の差異ではない集団間を比較した場合に，何についての格差かを正確に読み取る必要があるだろう．そして，その格差は様々な環境下で個人の能力や努力で解決することができるかどうかが，正当化できるかどうかという議論へとつながるのではなかと考えられる．そして，正当化できるのであれば不平等ではない考えることができると推察できる．また,「平等」とは，多様なものであることを認識した上で何を焦点とするかを定める必要があるものと考えられる．

なぜ「格差」と「平等」が問題かという問いにおいては，機会の平等の考え方の曖昧さゆえに，出自や環境が多様な人間の機会平等についての制度面が整っておらず，結果としての格差が大きく

なっていることが考えられる．また，競争や自己責任が正当化されるあまりに，結果としての不平等についての議論も同じように不十分であり，格差について何が正当化でき，何が許すことができないのかを社会全体で理解を進めていく必要性があるとも考えられる．したがって，何の格差が問題で何についての平等が求められているのかと，正当化される格差とは何なのかを明確にするための議論が必要であることが示唆できるだろう．

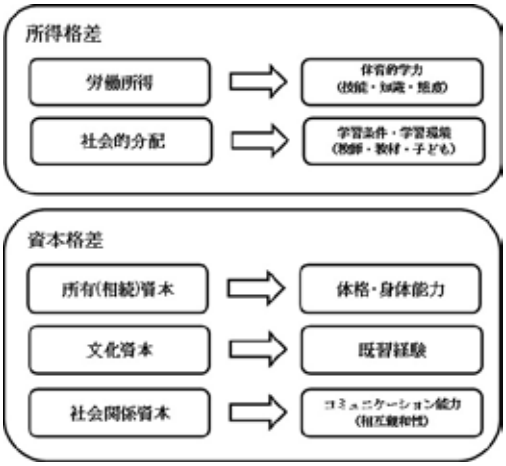

図1　競走の簡略図

以上のような考え方のもとで，「格差」の概念について考察を行うこととする．格差とは所得によるものと，資本によるものにわけて考えられる．所得格差は労働による所得格差と，社会的分配の結果による格差が考えられる．また，資本格差はお金が代表とされる所有資本格差，その人の学びの形としてとらえることができる文化資本格差，そして人間関係のつながりにおける社会関係格差の３つが考えられる．それらの格差の概念を体育授業で考えた場合，所得格差である労働所得は学んだ結果としての技能・知識・態度である体育的学力の格差に，社会的分配については子どもたちが授業で平等に学ぶための学習条件・学習環境の格差と置き換えることができる．次に資本格差である所有資本格差は持って生まれた体格・身体能力の格差，文化資本格差はそれまでに経験した学習内容や学習方法として考えられる既習経験の格差，そして社会関係資本の格差は対話を重ねながら学習していく過程の結果として得られると考えられるコミュニケーション能力の格差と置き換えることができる．

【研究2】

4. 方　法

研究1より導き出した概念をもとに，子どもたちに学ばれているカリキュラムについての考察を行う．Ａ高校に在籍する2年生の生徒118名を対象として，自分がこれまでに体育授業を経験して印象深かったことについて想起しを自由記述による回答を集約した．これを本研究のテーマに即して「格差」と「平等」に言及する特徴的なストーリーについて抽出して考察を行った.「格差」と「平等」を視座に体育授業について生徒が日々思っていることや感じていることについて考察をしていくことにより，実際に子どもたちに学ばれているカリキュラムについて理解ができるのではないかと考え，事例を検討するための対象を定めることとした．

5. 考　察

まず潜在的カリキュラムを日常の教育活動において，学習指導要領などにはっきりと明文化されていないにもかかわらず，いわば「学校文化」とも言われるような伝統的かつ政治的な観点で，子どもたちが経験している諸活動ととらえる．そして，「格差」と「平等」という視座を体育授業では優越感と劣等感と考え，子どもたちが体育の経験を想起したストーリーから潜在的カリキュラムの可能性を指摘することとする．

所得格差を視座として体育授業をとらえたとき，この格差を体育的学力の格差と学習条件・学習環境の格差として分類して事例にあてはめることができた．

ストーリー①　体育的学力の格差

中学の時，ソフトボールの授業で，試合中の姿を見て成績をつけてほしいと思った．ソフトボール投げやバッティングの距離だけでソフトボールの成績をつけてほしくない．

ストーリー②　学習条件・学習環境の格差

高校，並び方，声の大きさ，動きとか自分らがゲームしてる時以外の態度とか全部指定？してくるからやだ．中学は何しとっても先生とかそれにノってきてくれとったけど，高校はとりあえず注意するみたいな？やる気なくなる（笑）

それらの格差意識は，教師による競技スポーツに偏った授業観や学習内容とは異なる能力を測定する評価，さらには教師の都合から子どもに従順な行動を求めるアプローチが要因となって生まれているのではないかと考えられる．それらから学ばれていると考えられる潜在的カリキュラムは『格差意識』そのものであるだろう．

次に資本格差を視座としたとき，体格・身体能力の格差と既習経験の格差，そしてコミュニケーション能力の格差に分類して事例にあてはめて考察をした．

ストーリー③　体格・身体能力の格差

中学校3年，バスケットボール，コートが１つしか空いていなくて，運動神経のいい人達が集まってやっていた．自分たちもやりたかった．

ストーリー④　既習経験の格差

「陸上部」という肩書きのせいでよく運動神経がいいなどと言われますが，実際よくないです．大して速くないし，球技はからっきしダメなのでやめてほしいなぁー，といつも思っていました．今はテニス部ですが，まだ勘違いされます．たぶん．そして体育が苦手です…．

ストーリー⑤　コミュニケーション能力の格差

中学校一年のとき，バレーボールの授業で，2人チームを作って他のペアと試合をするという内容のときに，背の順でチームを作ったのですが，その内の1人が休みがちの子で，実際は3人のチームだったのですが，他の２人の子が運動ができる子で，私はとても運動が苦手なので，よく失敗をしてしまって，そのたびに2人とも「あーあ」みたいな感じの反応で，実際そのせいで負けてしまうこともあり，あのとき程体育やりたくないと思ったことはないです．

いずれの格差も元来所有している資本の差と考えられる．教師は子どもたちにそれらの差がはじめから存在している中で体育授業を行うことが考えられるが，ストーリーからは子どもたちが所有している資本の差を，教師が体育授業でそのままの差として子どもたちに認識させてしまっている現状が考えられる．その原因としては，教師が競技スポーツで扱う運動技能を習得させることを中心とした授業構成が推察できる．そのような授業によって子どもたちに学ばれていると考える潜在的カリキュラムは，『格差意識』そのものであると言えるだろう．

いずれの概念にも共通して格差意識が生まれる要因と考えられたのは，授業を構成する３つの要素である「教師・教材・子ども」の中で，教師のアプローチに大きな影響があることである．そして，格差意識を生み出す教師のアプローチとして以下の３つの観点を指摘することができる．

①競技スポーツ価値観

教師は結果としての勝敗や競技スポーツで扱う運動技能に焦点をあてた価値観だけではなく，子どもたち個々の目標達成やそのプロセスについても適切な焦点を持ち，子どもと教材を結びつけるような授業を構成することが求められるのではないだろうか．

②測定的評価観

教師は授業の目標について，実際の子どもたちの達成状況を適切に評価する必要があるだろう．その際に数値だけでは測れない項目があることも考えられ，子どもたちの行動観察で見えるものもあると考えられる．ゆえに教師は測定による量的観点だけではなく，質的な評価もできるようにする必要があるのではないだろうか．

③教師都合子ども観

主に教師が子どもとの関係に焦点をあてて授業構成を行う考え方であり，授業において支配や統制が必要条件であるという教師の意識の存在が推察できる．教師は子どもと教材の関係，言い換えれば子どもと運動の関係に焦点をあてた授業構成が求められているのではないだろうか．

子どもたちが元来持っている資本と考えられる体格・身体能力，既習経験，コミュニケーション

能力の格差を教師がその格差のまま体育授業で取り扱い，そして所得と考えられる体育的学力（技能・知識・態度），学習条件・学習環境が教師のアプローチによって格差を認識してしまう学習内容となることで，結果として授業において『格差意識』そのものが学ばれているのではないかと結論づける．体育の目標は，生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てることであり（文部科学省，2009），教師は競技スポーツ価値観だけではなく自己目標達成の価値観を，測定的評価観よりも質的な内容評価観で，そして教師都合子ども観ではなく運動関係子ども観でといった学習観を転換することが求められるのではないだろうか．

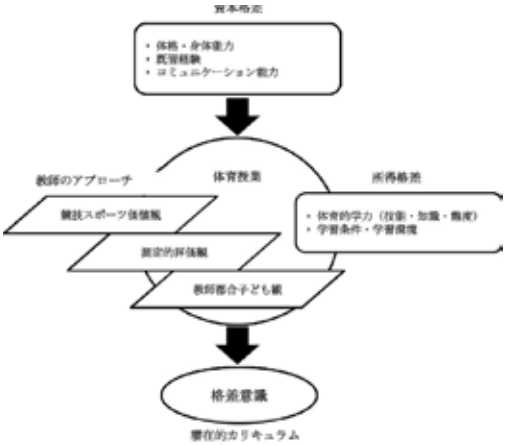

図２　体育授業の潜在的カリキュラム

6. まとめ

「格差」の概念を考えたとき，所得と資本にわけて考えることができる．そして，所得格差では労働所得の格差と，社会的分配の格差と考えることができる．また，資本格差はお金が代表とされる所有資本格差，その人の学びの形としてとらえることができる文化資本格差，そして人間関係のつながりにおける社会関係格差という３つととらえることができる．それらの概念を体育授業に置き換えて考えると，所得格差である労働所得は学んだ結果としての技能・知識・態度である体育的学力の格差，社会的分配は子どもたちが授業で平等に学ぶための学習条件・学習環境の格差としてとらえることができる．また，資本格差である所有資本格差は持って生まれた体格・身体能力の格差，文化資本格差はそれまでに経験した学習内容や学習方法として考えられる既習経験の格差，そして社会関係資本の格差は対話を重ねながら学習していく過程の結果として得られると考えられるコミュニケーション能力の格差ととらえることができる．

「格差」と「平等」という視座を体育授業では優越感と劣等感と考え，以上のように置き換えた格差の概念をもとに子どもたちが体育の経験を想起して書いたストーリーから潜在的カリキュラムの可能性を指摘することとした．子どもたちが元来持っている資本と考えられる体格・身体能力，既習経験，コミュニケーション能力の格差を教師がその格差のまま体育授業で取り扱い，そして所得と考えられる体育的学力（技能・知識・態度），学習条件・学習環境を，授業における教師のアプローチから子どもたちの格差の認識が生まれることが考えられる．その結果，学ばれていると考えられる潜在的カリキュラムは『格差意識』そのものであると言える．そして，格差意識を生み出す教師のアプローチとして３つの観点を指摘することができた．

①競技スポーツ価値観
②測定的評価観
③教師都合子ども観

体育の目標は，生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てることであり（文部科学省，2009），教師は競技スポーツ価値観だけではなく自己目標達成の価値観を，測定的評価観よりも質的な内容評価観で，そして教師都合子ども観ではなく運動関係子ども観でといった学習観を転換することが求められるだろう．

7. 引用参考文献

１）文部科学省：『高等学校学習指導要領解説　保健体育編・体育編』，東山　　書房，2009
２）トマ・ピケティ　山形浩生 守岡桜 森本正史訳：『21世紀の資本』，みすず書房，2014
３）アマルティア・セン　池本幸生 野上浩生 佐藤仁訳：『不平等の再検討』，岩波書店，1999

（指導教員　森　　勇示）